

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01006

研究課題名（和文）神宮御師資料の新たな発見に伴う信仰の地“伊勢”の総合的調査研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Ise, the Land of Faith, Following the Discovery of New Jingu Onshi Historical Materials

研究代表者

小林 郁（KOBAYASHI, Kaoru）

皇學館大学・研究開発推進センター・助教

研究者番号：90779654

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：橋村一族は、代々にわたって伊勢神宮（外宮）の神職と神宮御師職を世襲した一族である。本研究は、平成30年に新たに発見された橋村一族伝来の膨大な家政資料群の調査と、その資料群を中世以来守り継いできた橋村一族の分家（宰記家・主計家）の墓地調査を素材に、全国に伊勢参宮を広めた神宮御師の実態と、中世から近代における信仰の地“伊勢”の変容について、文献史学・考古学の両視点から検証したものである。16世紀から20世紀までの新出資料約1万点のうち、約半数の調査が完了した。また、17世紀から20世紀までの墓石54基の悉皆調査を行い、土中から墓石の欠損部分が発見される等、墓石本来の状態が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、1万点以上に及ぶ膨大な新出資料群の調査研究から生み出される知的財産情報の公開、研究事例の少ない神宮祠官・神宮御師の墓地における墓石群悉皆調査と研究成果情報の公開、の2点である。

従来の神宮御師研究では、資料現存数の差異により研究の進展が阻まれていることが課題となっていた。1万点以上を数える新出資料の網羅的な調査研究は、今後の研究発展に大きく寄与し得るものである。また、神宮祠官・御師家の墓石調査研究については類例が少ない上、近年では墓終いが進み伊勢市内の古い墓石が存続の危機に面している。墓石の悉皆調査を通じた知的財産の記録・継承という点に、本研究の意義を見出せる。

研究成果の概要（英文）：The Hashimura family is a family that has succeeded to the Shinto priesthood of the Ise Jingu (Geku) and the position of Jingu Onshi for generations. This study is based on a survey of a vast amount of family administrative materials inherited by the Hashimura family, which were newly discovered in 2008, and a cemetery survey of branch families of the Hashimura family that had been preserving these materials since the medieval period. This is an examination of the transformation of “Ise” from medieval to modern times from the perspectives of both documentary history and archaeology.

Of the approximately 10,000 newly discovered materials from the 16th to 20th centuries, about half have been examined. In addition, an exhaustive survey of 54 gravestones from the 17th to the 20th centuries was conducted, and the original state of the gravestones was clarified, including the discovery of missing parts of some gravestones in the soil.

研究分野：日本中世史

キーワード：神宮御師 伊勢神宮 伊勢信仰 伊勢参宮 橋村氏 史料研究 墓石群調査

1. 研究開始当初の背景

(1) 神宮御師研究の現状と課題

神宮御師の研究は、長きにわたって中世・近世・近代の幅広い研究者層から注目が集められ、今日に至るまで多角的な視点からの研究がなされている。しかし、研究素材となる史資料の数は御師家によって差が大きく、写しすら皆無の状況にある家も少なくない。このような関連史資料の制約は、従来の神宮御師研究にとって克服し難い大きな問題のひとつとなっており、未だ解明されていない部分が多く残されていた。

(2) 新出史資料群「伊勢御師橋村家関係資料」と同氏墓石群の調査研究

平成30年初夏、三重県伊勢市に所在する神宮御師橋村氏の旧宅から、中世から近代までの数百年分に及ぶ膨大な家伝史資料群が新たに発見された。総数10,000点を超える本史資料群は、現存する神宮御師関係資料の中でも最大級を誇る規模であり、神宮（外宮）神職・神宮御師・山田三方（自治組織）構成員といった複数の役割を兼帯していた橋村一族の性格から、神宮祠官・神宮御師・町政関連の史資料が豊富に含まれている。

また、今回の発見に伴い、本史資料群を代々継承してきた橋村氏の分家（宰記家・主計家）の墓石群調査の機会にも恵まれた。橋村一族の墓地は、三重県伊勢市浦口に所在する「天神丘墓地」と、同市常盤に所在する「屏風山墓地」の2箇所に分かれる。このうち、広大な墓域を有する「天神丘墓地」は近世都市山田のいわゆる「惣墓」にあたるのに対し、「屏風山墓地」は橋村宰記家とその分流である主計家に限定された一族墓的な様相に近い。

このような膨大な神宮御師関連史資料群の新たな発見と、従来ほとんどなされてこなかった神宮祠官・御師家の墓石群調査の機会を得られたことこそが、本課題研究を着想するに至る大きなきっかけとなったのである。

2. 研究の目的

神宮御師橋村氏に伝来した「伊勢御師橋村家関係資料」は、同一族5家分にわたる膨大な史資料群であり、年代も神宮御師最盛期の中世・近世から廃絶後の近代まで幅広く、これほどの規模を有する神宮御師関連史資料群の発見は近年稀に見るものである。また、神宮祠官や神宮御師の墓地に関する調査研究は類例が少ないため、史資料群と墓石群の調査研究を同時に遂行することで、歴史的視点はもちろん、宗教学・国学・古文書学・考古学等、他分野にわたる学問領域の基礎的資料情報としてアプローチすることが可能である。

よって本研究の目的は、新出史資料群となる「伊勢御師橋村家関係資料」約10,000点と、同史資料群を代々継承してきた橋村一族の墓石群を網羅的かつ総合的に調査・整理することで、中世・近世・近代の伊勢神宮や宗教都市山田の変容に関する研究を大きく進展させる知的財産、伊勢神宮研究にとどまらない学際的な基礎的資料として社会に公表することにある。

3. 研究の方法

①「伊勢御師橋村家関係資料」の目録作成

本史資料群の悉皆調査は、代表者が勤務する皇學館大学佐川記念神道博物館内で行い、史料にとって安全な環境を心掛けた。文書調査のメンバーは、研究代表者の小林郁を筆頭とし、神宮御師や神道関連の研究を行っている皇學館大学の教員や、三重県の歴史に詳しい県内外の博物館関係者、かつて『三重県史』の編纂に従事した経験者、博物館学芸員資格を目指す皇學館大学の大学院生・学部生といった、くずし字読解や史料整理・調査に長けた人物を中心とした。

書籍類の調査については令和2年度から着手し始め、小林郁監督のもと、書誌学とくずし字読解に明るい研究協力者に作業を一任し、適宜研究分担者である浦野綾子が補助に入る形で進めた。文書・書籍類以外の史資料については、企画展に出陳した物を中心として適宜調査を進め、目録の土台となる悉皆調査を計画的に遂行した。

また、「伊勢御師橋村家関係資料」の持つ学術情報の永続的な保管と公開のため、将来的なアーカイブシステムへの導入を視野に入れたメタデータの作成・史資料のデジタル化（写真撮影）を適宜進めた。

②史資料群・墓石群の調査研究の成果公開（企画展開催・研究調査報告書発刊 等）

本研究で得られた知的財産・情報については、様々な機会を通じて世間に公表した。

1つは、代表者が勤務する皇學館大学佐川記念神道博物館において、本研究で得られた研究成果を活用した展覧会を2回開催した（御師制度廃止150年「伊勢参宮の先導者たち—隆盛・廃止—その後—」（令和3年度）、「ある伊勢御師の軌跡—新発見・橋村家伝来資料から—」（令和5年度））。2つは、5年間の調査研究成果を研究調査報告書（A4判124ページ、令和6年3月31日付発行）にまとめ、研究機関や図書館施設等の関係各所に配布した。

なお、調査研究の詳細は、「4. 研究成果」を参照。

4. 研究成果

(1) 「伊勢御師橋村家関係資料」の悉皆調査

今回新たに発見された「伊勢御師橋村家関係資料」には、少なくとも橋村氏の本家（主膳家）と4つの分家（宰記家・主計家・大蔵家・織部家）の家政史資料が集まっているとみられ、特に文書類に関しては主膳家・宰記家の伝来が大半を占める。全体的な年代としては近世・近代のものが大半を占めるが、中には複数の中世文書が確認されており、現在の調査研究段階では永正6年（1509）に作成された「国宗左衛門末弘道者売券 附道者覚書」が最も古い。大まかな種別としては文書類や和装本が最も多く、軸装された書画類のほか、祓具や奉納品、御祓大麻の版木といった器物類もいくつか見られる。

総点数は概算で10,000点を超えており、この分量はこれまで確認されている神宮御師資料の中でも群を抜く規模となる。本史資料群の整理・調査研究進捗としては、2023年度末の段階で文書類3,933点、書籍類（和装本）1,004点、雑（器物類等）10点の悉皆調査を終えており、研究成果の一部については、2021年度・2023年度の企画展をはじめとした多くの機会を設け世間に公表している（後述の「研究実績」参照）。その膨大なゆえ、全ての調査研究が完了するには時間を要するが、現時点で新たな史資料が発見され続けている状況から、今後更に点数が増加する見込みである。

従来の研究では伊勢御師の活動面に特化したものに偏っている傾向にあり、彼らの「家」自体を掘り下げた研究はあまり行われてこなかった。しかし、今回新たに発見された「伊勢御師橋村家関係資料」は、まさしく橋村一族の歴史が濃密に凝縮された稀有な存在であり、これまで等閑視されてきた神宮御師の「家」研究の素材となる家政史資料が豊富に含まれていることから、今後の研究発展に大きく寄与し得るものとして注目できる。

なお、本史資料群の調査研究においては、全体を文書類【A群】・書籍類【B群】・軸類【C群】・雑【D群】の4つのカテゴリーに分けることで作業の効率化を図った。現段階で整理済の史資料から抽出した情報に限るが、以下にそれぞれの概要を記す。

【A群：文書類】

「伊勢御師橋村家関係資料」の中でも圧倒的な数を占め、年代は中世から近代と幅広い。明治4年の御師制度廃止を経て、最終的に主膳家・宰記家・主計家・大蔵家の4家分が集約されることとなったが、その大半は主膳家・宰記家の伝来文書である。

本家である主膳家が、「橋村八郎大夫」として15世紀の段階から御師活動を行っていたことは先述したが、近世において本家を凌ぎ、一族屈指の活動を見せたのが「宰記家」である。当家は「橋村肥前大夫」の御祓銘で肥前国を中心に北九州一帯を檀所とした有力御師家であり、檀家数は18世紀後半段階で114,021軒という規模を誇った。また、佐賀藩主鍋島氏を中心とした武家を大手の檀家としていたため、新出となる歴代藩主からの書状も数多く確認されている。何より注目すべきは、橋村氏が御師業を営む過程で作成された家政文書が大量に現存している点であり、家臣の雇用に関する書類や手代による廻檀覚書等、他の御師資料にはあまり見られない多彩な内容となっている。さらにこれらの文書の多くは、歴代の当主によって定期的に整理された痕跡が見受けられる。

また、叙爵時に朝廷から出される口宣案等、神職に関わる文書類も多く残されている。特に、外宮摂社の「田上大水神社」に関わる資料が一括で発見されたことは貴重であり、橋村氏を含む度会四門の神主家らによる同社の運営・祭祀の詳細を知ることが可能となる。

【B群：書籍類】

文書類の次に点数が多い。装丁はほぼ和装本となるが、一部近代の洋装本も含まれる。現段階で未調査の部分が多いため全容は定かでないが、代表的なものとしては、幕末から大正期にかけての参宮人帳や神職の『交名帳』、橋村本『考訂度会系図』（素材含む）等がある。詳細な分析は各論に譲るが、近代の参宮人帳は御師制度廃止以降の橋村氏の動向や旧檀家との関係を知る上で重要であり、橋村本『考訂度会系図』については、内容から神宮文庫所蔵の浄書本『考訂度会系図』の前身にあたるものと考えられる、従来知られてこなかった史料である。

また、幕末の宰記家当主にして歌人・画人であった橋村正克の編纂物も多く見られ、日頃詠み重ねた和歌を年ごとに製本したものや、歌詠みに明るい同業者（神職・御師等）と開催した歌会の記録、師である足代弘訓と編纂したとみられる和歌や活用形に関する研究書の校訂本、さらには正克が幼少期（9～14歳）に作成した手習い書といったものまで、数多くの関連書籍が確認されている。

【C群：軸類】

卷子については、『橋村大蔵家系図』や『中臣祓・二所太神宮参宮儀式』等、現段階で数点を数えるのみが発見されている。

一方、掛軸については、橋村氏によって蒐集された書画類が大半を占める。虫菌害の影響で状態の悪いものが多く、現段階で未調査のものがほとんどとなっている。しかし、大正から昭和初

期にかけて作成された蔵書目録類を見るに、史料点数はかなりの数に上ると推測される。

【D群：雑】

文書類・書籍類・軸類に属さない全ての史資料を一括で区別したのが「雑（D群）」である。そのため、史資料の種別は多彩なものとなっているが、「伊勢御師橋村家関係資料」全体から見ると割合は少ない方となっている。

まず、軸装されていない「まくり」状態の書画類が多く現存しており、ほとんどがB群（書籍類）の中で紹介した橋村正克の作品となる。幼少期から画を好んだ正克は、母の並子と共に京の画家である谷口藹山に師事し、雅号を「香圃」と名乗った。「伊勢御師橋村家関係資料」に見られる正克の画は試し描きと思われるものが多く、中には描き方指南の描写を含む画もある。

また、器物類についても何点か確認されており、基本的に御師活動に関連する資料が中心となる。内容としては、御祓大麻の版木（織部家）や御祓銘の書かれた大看板、印章類、什器類、袂具、檀家からの奉納品等と多岐にわたり、中には他の御師資料にはあまり見られない珍しい資料も見られる。器物類は未だ調査の余地が残されているため、今後更なる発見が期待できよう。

<調査概要>

「伊勢御師橋村家関係資料」は橋村氏分家の母屋や外蔵に安置されており、同家後裔の了解を得て、史資料の安全確保と本調査研究の効率化を目的に、平成30年初夏に皇學館大学佐川記念神道博物館へ移管した。その後、膨大な史資料群をA群（文書類）・B群（書籍類）・C群（軸類）・D群（雑）の4つのカテゴリーに分類し、一番分量の多いA群（文書類）から調査を開始した。

調査を行うにあたって、まずは比較的まとまりのある文書群から着手し、各文書に資料番号を付すところから始めた。その後、各メンバーが文書束を一つずつ担当し、本課題研究用に作成した調査カードに史料情報を記録していった。研究期間内で整理・記録した文書類は全42回の調査で3,933点に及び、主膳家伝来の重要文書を中心とした「A1」（1,318点）、主膳家・宰記家・主計家といった複数の家伝文書が集約した「A2」（688点）、橋村氏の氏神を祀る田上大水神社の関係文書群である「A3」（1,276点）、宰記家伝来文書を中心とした「A4」（624点）の悉皆調査が完了している。なお、2023年時点では「A5」に分類した文書の調査にも着手し始めており、途中状態ではあるが、27点の文書類が調査済みである。調査会は大学や博物館施設の繁忙期を除き、平均で月に1~2回のペースで終日かけて行ったが、2020年初頭以降の新型コロナウイルス感染症の発生は調査の進捗状況に大きな影響を及ぼすこととなり、万全な感染症対策のもと調査を行うよう努めたが、時には世上の方針によって研究活動が制限されることもあった。

書籍類の調査については令和2年度から着手し始め、まずは書籍類のほぼ全てを中性紙箱に収納し、文書類と同じく比較的まとまりのあるものを選定し、資料番号を付した。新型コロナウイルス感染症の影響で制限を受けつつも、2020~2023年度（4年間）で和装本を中心とした1,004点（B1~B17）の悉皆調査が完了している。

なお、全体量がほぼ判明している文書類・書籍類の整理を優先したため、軸類・雑に関しては未調査の部分が多い。軸類については、損傷の激しいものが多く含まれているため保存環境整備のみが完了している状態であり、悉皆調査には時間を要することが予想される。また、雑に分類した史資料については種類が豊富であり、未だ我々が把握していない物も多くあることが考えられるため、現段階では2021年度・2023年度に開催した企画展の出陳物（もしくはその関連物）に限り調査を終えている状態である。これらの史資料については、企画展を担当した小林郁・浦野綾子が中心となり調査を進めた。

5年間にわたる調査研究で得られた成果については、最終年度末に作成した研究調査報告書の中でまとめ、関係各所に配布することで広く世間に公表した。

<今後の展望>

史資料の点数だけを見ると、現段階で全体数の約半数の調査を終えたことになるが、未だ把握できていないものの分量も含めると、実質的には3分の1程度となるかと思われる。また、調査済の史資料についても、まだ内容の情報収集段階に留まっているものも多い。

今後はさらに史資料の調査を進めていくと共に、収集した史資料情報を用いた詳細な分析・研究が課題となってくるだろう。

（2）橋村宰記家・主計家の墓石群調査

橋村一族の墓地は、現在の伊勢市浦口町に所在する「天神丘墓地」と、同市常盤町の「屏風山墓地」の2箇所に分かれている。このうち、屏風山は「橋村肥前大夫」の御師銘で知られる宰記家と、その分流である主計家の区域であり、他家の墓地は全て天神丘側に展開されていることから、屏風山は宰記家に連なる一族単独の墓所という性格が強い。なお、両家の墓域はもともと常勝寺（明治の廃仏毀釈で廃寺）の敷地内に所在しており、かつて当寺の僧侶であった橋村正滋が、肥前国一帯の檀家を携えて生家の主膳家を離れ還俗し、宰記家を立ち上げたことが強く関係していると考えられる。先述した「伊勢御師橋村家関係資料」は両家後裔の邸宅から発見されたものであり、そのため本研究課題では、「屏風山墓地」に祀られる両家の墓石群を調査対象とした。

宰記家・主計家の墓地には、54基（宰記家33基・主計家19基）の石塔・石仏が存在する。

年代は17世紀初頭から20世紀に及んでおり、「五輪塔」2基（No.6・No.22）、「南伊勢系板碑形石塔」6基（No.7・No.9・No.21・No.23・No.24・No.43）、「駒形石塔」12基（No.1～5・No.8・No.18～20・No.30・No.41・No.47）、「楯形石塔」28基（No.10～17・No.25～27・No.29・No.31・No.32・No.34・No.36・No.38～40・No.42・No.44～46・No.49・No.50・No.52～54）、「無縫塔」4基（No.28・No.33・No.35・No.37）、「石仏」2基（No.48・No.51）から成る。

婚姻等で両家を離れた人物を除き、系図上の人物と現存する墓石を比較すると、宰記家が全36名中33名で約92%、主計家が全20名中19名で95%となり、墓石残存率は比較的高い結果となった。また、系図上の人物で墓石が確認できないのが、宰記家4代当主・正甫の子である「金」「松之丞」「某」（いずれも早世）と、主計家2代当主・正身の女子（生没年・戒名不明）の4名である。少なくとも、正甫の子3名については子供の墓石が集中している最後列に位置すると考えられ、背後の斜面の土が崩れる等して埋没している可能性がある。なお、現存する墓石のうち、「妙春丘尼」（No.53）と「超雲輝光信士」（No.54）については系図上で確認ができず、配置状況も他の墓石と大きく異なるため、当2基は両家の墓石でないかと推定される。

「屏風山墓地」は主計家の一部の墓石を除き、正面から見て右側に宰記家（墓域の3/4）、左側に主計家（墓域の1/4）の墓石が配置されている。宰記家の墓石は最前列（No.6～16）が全て当主であり、10代正克（No.39）を除き右から代数・没年の順に並んでいる。当主の妻は概ね2列目に配置され、7代正因許嫁（No.50）・9代正並妾2名（No.49・No.52）以外は夫の墓石の背面に位置している。また、当主の子の墓石は男女関係なく2列目以降に配置されており、続柄と配置に関する法則性は見いだせない。

一方、主計家の墓石は当主・当主の妻・当主の子で区域が分かれておらず、配置と没年に相関性が無く墓石数のも少ないことから、続柄や年代に関する配置に法則性は見られない。橋村正栄筆『橋村一党系図』によると、主計家2代当主・正身をはじめとする複数人の葬地を「葬于上三郷領之山宇天神上」としており、地名から現在の「天神丘墓地」に比定できることから、少なくとも正身等の墓石は後世に「屏風山墓地」へ移転してきたと考えられる。

<調査概要>

墓石調査の研究協力者は、かつて外宮御師白米家の墓地調査に携わった有識者を中心とした。

まずは本研究の代表者・協力者による綿密な事前打ち合わせを行い、対象となる屏風山墓地の調査方針を定めた。現地では墓所全体の測量と墓石配置の確認後、実測・拓本・銘文解読・写真撮影をメンバーで分担し、それぞれの成果物をデータ化した。調査は、同家祖霊祭祀の期間を除いた土曜日の午後を中心に年5～6回のペースで行い、同家後裔のご配慮により、調査期間前後には魂抜き・魂入れの祭儀と共に調査安全の祝詞を奏上いただいた。しかし、「伊勢御師橋村家関係資料」の悉皆調査と同じく、一時期は新型コロナウイルス感染症の影響で作業を中止せざるを得ない状況に見舞われることもあった。

屏風山墓地には、17世紀前半から20世紀にわたる54基の墓石が立ち並ぶ。このうち、拓本については主要な墓石を選定したが、実測図作成・銘文解読・写真撮影については全基を対象とした。中には墓石同士が近接しているものや地中に埋没しているものもあり、拓本や銘文に関しては一部解析が不可能な墓石が数基見受けられた。また、墓石群背後の丘陵に生い茂る竹林の根が土と共に前方に迫り出されることで、いくつかの墓石が倒れたり、埋没したりしていた。我々は調査をする中でそれらを掘り出し、据え直すことで、配置を復元することにも努めた。中には転倒や経年劣化で一部が欠損しているものも見受けられたが、何基かは調査の過程で墓域周辺から欠損部分が発見され、墓石本来の状態を明らかにできたことは大きな成果である。

なお、宰記家・主計家の墓石調査は本課題研究内で完結するものとし、最終年度末に発刊した研究調査報告書の内容は、5年間にわたる調査研究の集大成となる。

<今後の展望>

本課題研究終了時点で、「屏風山墓地」に配置されている54基全ての墓石が調査完了しており、調査研究成果の全ては令和6年3月31日発刊済の研究報告書にまとめた。しかし、本課題研究で対象としたのは、12家存在する橋村一族のうち2家分であり、本家である主膳家を含めたその他の家については概要的な部分に触れるのみに留まった。神宮祠官・御師家の墓石調査研究については類例が少なく、さらに「今北山墓地」（内宮側の惣墓）・「天神丘墓地」共に近年墓終いが進み、古い墓石群の存続が危機的状況となっている。本課題研究を皮切りに、橋村一族を含めた新たな墓石調査の機会が得られることを期待したい。

※本報告は、本課題研究の研究調査報告書（令和6年3月31日発刊）の内容を元としている。

特に、墓石群調査の内容については、伊藤裕偉「伊勢御師橋村一族の墓域」・小林秀「屏風山墓地と常勝寺」・竹田憲治「石塔の概要」・斎藤隼人「配置と校正」・山路裕樹「刻銘について」の記載内容から一部抜粋した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林郁	4. 巻 第9号
2. 論文標題 神宮御師橋村家資料における新出の中世道者売券について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 皇學館大学研究開発推進センター紀要	6. 最初と最後の頁 331-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷口裕信	4. 巻 第72巻第4号
2. 論文標題 明治維新期の伊勢参宮 橋村主計家の参宮人帳を事例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小林郁	4. 巻 第261号
2. 論文標題 神宮御師に関する新出資料群の基礎的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神道宗教	6. 最初と最後の頁 139p/141p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 谷口裕信、濱千代早由美	4. 巻 第9号
2. 論文標題 利根川・渡良瀬川合流地域の自然災害：旧伊勢御師岩井田家宛の書簡から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報 首都圏史研究	6. 最初と最後の頁 101p/104p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林郁
2. 発表標題 コメント：中世における神宮御師形成の視点から
3. 学会等名 神道宗教学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 KOBAYASHI Kaoru
2. 発表標題 Ise Shrine and Onshi in Japanese Medieval period
3. 学会等名 Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia , International Conference (課題番号 : 20B103)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林郁
2. 発表標題 中世後期における伊勢御師の様相 道者売券を中心に
3. 学会等名 2022年度地方史研究協議会 第72回（三重）大会 “ 出入り ” の地域史 求心・醸成・発信からみる三重
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林郁
2. 発表標題 伊勢御師の形成期における道者について
3. 学会等名 地方史研究協議会準備報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林郁
2. 発表標題 中世伊勢御師研究素材としての檀那帳について
3. 学会等名 日本道教学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林郁
2. 発表標題 神宮御師に関する新出資料群の基礎的研究
3. 学会等名 神道宗教学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 小林郁 ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 -
3. 書名 東海の中世史 5 『信長・家康と激動の東海』	

1. 著者名 小林郁 ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 東海道中世史研究 2 『領主層の共生と競合』	

1. 著者名 谷口裕信 ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 336
3. 書名 『関東大水害－忘れられた1910年の大水害－』	

1. 著者名 小林郁、浦野綾子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 皇學館大学佐川記念神道博物館	5. 総ページ数 68
3. 書名 企画展図録『ある伊勢御師の軌跡－新発見・橋村家伝来資料から－』	

1. 著者名 小林郁 ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 304
3. 書名 『“出入り”の地域史－求心・醸成・発信からみる三重－』	

1. 著者名 小林郁、谷口裕信、浦野綾子 ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 皇學館大学研究開発推進センター（小林郁）	5. 総ページ数 124
3. 書名 『令和元年度～令和5年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「神宮御師資料の新たな発見に伴う信仰の地”伊勢”の総合的調査研究」（課題番号：19K01006）研究調査報告書』	

1. 著者名 小林郁、谷口裕信、浦野綾子、櫻井治男	4. 発行年 2021年
2. 出版社 皇學館大学 佐川記念神道博物館	5. 総ページ数 68
3. 書名 御師制度廃止150年展『伊勢参宮の先導者たち - 隆盛・廃止・その後 - 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p><講演会> 小林郁「中・近世の伊勢御師と御師」（就実大学吉備地方文化研究所、2020年）/同「伊勢御師とは何だったのか～御師制度廃止150年を迎えて～」(生涯学習センター、2021年)/同「ギャラリートーク：伊勢参宮の先導者たち - 隆盛・廃止・その後 - 」(皇學館大学佐川記念神道博物館、2021年)/同「中世・近世の伊勢参宮～御師制度廃止150年を迎えて～」(四日市市市民文化振興課、2021年)/同「伊勢御師にみる“おもてなし”の歴史」(株式会社伊勢福、2022年)/谷口裕信「御師廃止の背景と影響」(伊勢郷土会、2022年)/小林郁「御師の形成と発展」(伊勢郷土会、2022年)/同「神宮御師資料研究の現在地を紐解く現状と課題～橋村家関係資料を例に～」(NPO法人旧御師丸岡宗太夫邸保存再生会議、2023年)/同「伊勢御師の家伝資料～橋村家を例に～」(伊勢郷土会、2023年)/浦野綾子「足代弘訓と橋村正克」(皇學館大学佐川記念神道博物館、2023年)/谷口裕信「橋村家と檀家の近代 - 参宮人帳を手がかりに - 」(同)/小林郁「ギャラリートーク：ある伊勢御師の軌跡 - 新発見・橋村家伝来資料から - 」(同)/竹田憲治「伊勢の石仏・石塔」(同)/小林郁「家伝資料に見る伊勢御師～橋村一族の歴史と実態～」(公益財団法人伊勢文化会議所、2023年)/同「初公開！伊勢御師の家伝資料～橋村一族の軌跡～」(三重県生涯学習センター、2023年)/谷口裕信「伊勢御師廃止後の宇治山田旅館業」(放送大学、2024年)</p> <p><展覧会> 「伊勢参宮の先導者たち - 隆盛・廃止・その後 - 」(皇學館大学佐川記念神道博物館、2021年)/「ある伊勢御師の軌跡 - 新発見・橋村家伝来資料から - 」(同上、2024年)</p> <p><ジャーナル> 小林郁「史料が語る伊勢信仰」(神社新報第3598号、2022年)/同「明治の神宮改革と御師」(神社新報第3610号、2022年)/同「初公開！伊勢御師の家伝資料」(神社新報第3646号、2023年)/同「先人が遺す「災害の記憶」」(神社新報第3670号、2024年)/中日新聞「1満点余りの新資料を調査 江戸時代、お伊勢参りブームを支えた「御師」の実態明らかに」/「御師」の資料 活動物語る」(中日新聞社(研究関係者以外の執筆)、2023年)/中日新聞「波の詩」(中日新聞社(研究関係者以外の執筆、2023年))</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷口 裕信 (TANIGUCHI Hironobu) (10440835)	皇學館大学・文学部・教授 (34101)	
研究分担者	浦野 綾子 (URANO Ayako) (30825774)	皇學館大学・研究開発推進センター・准教授 (34101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	伊藤 裕偉 (ITOU Hirohito)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	牛田 孝子 (USHIDA Takako)		
研究協力者	梅田 優歩 (UMEDA Yuho)		
研究協力者	大澤 誠 (OOSAWA Makoto)		
研究協力者	扇野 耕多 (OGINO Kota)		
研究協力者	桐谷 美帆 (KIRITANI Miho)		
研究協力者	小林 秀 (KOBAYASHI Shigeru)		
研究協力者	斎藤 隼人 (SAITO Hayato)		
研究協力者	櫻井 治男 (SAKURAI Haruo)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	竹田 憲治 (TAKEDA Kenji)		
研究協力者	谷戸 佑紀 (TANIDO Yuki)		
研究協力者	手倉森 結南 (TEKURAMORI Yuina)		
研究協力者	新田 恵三 (NITTA Keizo)		
研究協力者	服部 早希 (HATTORI Saki)		
研究協力者	溝渕 智美 (MIZOBUCHI Tomomi)		
研究協力者	山路 裕樹 (YAMAJI Hiroki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------